

演題「忍術書で考察する火術の転換点」 中島篤巳

火術が興味の対象となる事は少なく、忍術書にある術技の中では敬遠して飛ばし読みする部分であろう。ここでは火術の面白みの一部として、術技のターニングポイントに焦点をあてて紹介する。忍者の火術に対する考え方は、『万川集海』によれば、「凡そ世上、火器を以て忍術要道の根元と為す。其の要と為す第一は城郭陣営の堅固為りと雖も、火を放ち、焼失の術に利有り。第二に昼夜を分たず味方と与し、相図の利有り。第三に風雨に消えざる炬火を以て味方の難を救ふの利有り。是故に、学ぶ者これを能手練す。則、時に臨んでこれを用いるべし。今世は忍者と号すは火器の五三方を以て忍術を得たりと為す。荷(いやしく)も其の本源を知らずに、枝葉を以てこれを取り、これを用うるは、豈歎くべからざるなるか。著す所の吾家流の源は則、陰陽両術の深理を以て輒(たやすく)敵城へ忍び入り、忽然として敵を挫くの術なり。孫子曰く。“軍術の中、火攻を以てするは下策なり”。然りと雖も止むを得ざれば(忍びは)則これを用ゆ。故に此の編を以て“忍書の卷末に附すのみ”（『万川集海』）と断り書きをし、正統二卷におよぶ火術書「大尾」で膨大な術数を記し、『万川集海』畢とした。火術は相図、照明、放火、爆破、護身など用途が広く、忍びの必携の術技であった事に違はない。この学会では火術の転換点について報告する。転換点とは①発火法の転換点。これは『万川集海』『火の卷松明目録』などを参考にして述べる。②着火の転換点。これは打管式鉄砲に必要な燧薬について述べ、雷汞の兆に触れる（『秘伝方之口書』『森重流砲術附属燧薬製巻』）。③炬火に着色。色の種類を増やす事で相図の伝達が量質ともに飛躍的に増した。この点は花火の一手手前の相図火としての『安盛流相図本発出之図書』で紹介する。